

# 「純ロシア」化の拠点？ ——アブハジアにおける新アトス修道院の役割\*——

志田恭子

はじめに

1875年8月、オスマン帝国領ギリシャの正教聖地である聖山アトス<sup>1</sup>から、数人のロシア人修道士がロシア帝国領のスフミ軍管区（現在のアブハジア）<sup>2</sup>を訪れた。訪問の目的は、黒海に面したこの地域に新しい修道院を建設してアトスから移住するための下見だった。移住の理由は、アトスにおけるギリシャ人修道士団との間の摩擦であり、特に以下で見るように、1874–1875年にアトスの聖パンテレイモン修道院で起こったマカーリー修道院長就任問題が直接の引き金となっていた。

彼らはスフミ近郊に位置するアナコピアと呼ばれる山を移住先を選び、当時の現地統治者であるカフカース総督ミハイル・ニコラエヴィチ大公（在任 1862–1881年）の許可を得た。こうして聖パンテレイモン修道院のロシア支部「新アトス修道院」の建設が12月に開始されることとなる。

このロシア人修道士団のアブハジア移住の希望を最初にミハイル大公に取り次いだのは、イスタンブル駐在のロシア大使 H.П.イグナチエフ（在任 1864–1877年）だった。彼は修道士の移住に関して、ミハイル大公に以下のような見解を述べた。

アトスにおける我々の修道士団の深い正教信仰、清廉で峻厳な修道生活、そして純ロシア

---

\* 本稿は、報告において提出したペーパーを、当日のコメントを参考に加筆修正したものである。コメンテーターをお引き受け下さった千葉大の渡辺圭氏ならびに有益なご指摘・ご助言を賜った方々に深く感謝申し上げる。今回反映できなかった部分については今後の課題とさせて頂きたい。

<sup>1</sup> 聖山アトスは現在ギリシャ領で、古くから正教修道士による自治国家として認められてきた。建国年は聖アタナシオスによってメギスティス・ラウラ修道院が建てられた963年とされる。ビザンツ帝国の創始者ユスティニアヌス帝（在位 306–337年）がアトスに最初の修道院を開き、背教帝ユリアヌス（在位 331–363年）がそれを破壊したという伝説がある。高橋栄一、辻成史『世界の聖域 13・聖山アトス』講談社、1981年、51, 54–55, 80–81頁。

<sup>2</sup> 1810年にロシアに併合されたアブハジアは自治を認められていたが、1864年に自治を廃止されてスフミ軍管区（Сухумский военный отдел）となり、1883年から1917年までスフミ管区（Сухумский округ）となる。

的精神（чисторусский дух）からみて、これらの修道士たちがカフカースにおいても有益で熱心な活動によって正教を普及し、地域をロシア化（обрусение）することは確実です。<sup>3</sup>

この意見に賛同したミハイル大公は、彼らの移住を承認し、広大な土地を付与したのである。このように、彼らの移住にあたっては、アトスにおけるギリシャ人修道士団との軋轢を回避するのみならず、移住先であるアブハジアの正教・ロシア化を促進することが期待されていたのだった。

翌 1876 年に完成した新アトス修道院には、アブハジアに対する「宗教的・啓蒙的な影響力を期待し、その課題達成の手段として」<sup>4</sup>、現地アブハズ人の子供を教育するための付属小学校が建てられた。またかつてカトリコス（教会首長）座が置かれていたアブハジア古来の聖地ピツンダは、1885 年に聖堂とその領地を新アトス修道院に併合されることとなる。

そして 1898 年の新聞『カフカース』の記事は、イグナチエフと同様に、アブハジアの「純ロシア的」拠点としての新アトスの重要性を強調している。

新アトスはアブハジアの正教中心地であるのみならず、文化的拠点でもある。そして近郊のロシア人移住者に多大な援助をしている。また 300 人の修道士、400 人の助修道士、数百人の労働者が勤務している。これは正真正銘の、純ロシア的な（чисто русский）、正教文化の拠点であり、宗教的・経済的のみならず極めて重要な政治的意義を有している。<sup>5</sup>

イグナチエフと同様に、単に「ロシア的」ではなく「純ロシア的」と純粋性を強調しているのは、おそらく同じ正教のグルジア人への対抗意識を示すものと推測される。このように、ロシアが、単なるアブハジアの正教化ではなく、グルジアに対抗した「純粋なロシア正教」化を目指したことを示唆する例としてよく知られるのが、1912 年、カフカース民政長官<sup>6</sup> だった Г.С.ゴリーツィン（在任 1897–1904 年）と次期グルジア・エクザルフ<sup>7</sup> のアレクシー（在位 1913–1914 年）が宗務院に提出した請願書である。

<sup>3</sup> ЦГИАГ (Центральный Государственный Исторический Архив Грузии), ф. 7, оп. 1, д. 3097, л. 8.

<sup>4</sup> ЦГИАГ, ф. 493, оп. 1, д. 1063, л. 1.

<sup>5</sup> Олонецкий А. Православная церковь как орудие колониальной политики царизма в Абхазии // Материалы по истории Абхазии. Сборник первый. Вып. 15. 1939. С. 141.

<sup>6</sup> Александр 2 世暗殺後の 1881 年にカフカース総督(наместник)にかわって、内務省に属する民政長官(начальник главного управления главноначальствующего гражданской частью)により統治された。「最初の純ロシア的なロシア化主義者」と呼ばれた初代民政長官ドンドゥーコフ・コルサコフ時代はロシア語教育の強制が行われたとされる。1905 年から再び総督制が復活する。高橋清治「ロシア帝国とカフカース総督府」『ロシア史研究』第 59 号、1996 年、36–53 頁；同「帝国のカフカース支配と『異族人教育』」『ロシア史研究』第 60 号、1997 年、73–82 頁。

<sup>7</sup> 一般に「エクザルフ」の称号は、コンスタンティノーブル、アンティオキア、アレクサンドリアの総主教(Патриарх)と異なり、ブルガリアやグルジアなど完全独立ではない総主教に用いられる。たとえば佐原徹哉はブルガリアについて「総主教代理座」

アブハズ人とロシア人住民が優勢であるスフミ主教管区を、極めて望ましくないグルジアの影響から引き離すことが望ましいのです。その目的のために、スフミ主教管区をクバンに併合するのは有効かもしれませんが。クバン地域には純粋なロシア正教徒住民（*чисто русское православное население*）が 1,716,245 人おられます。黒海沿岸の様々な言語を持つ 10 万人の住民は、この大人数の中に容易に溶け込むことでしょう。<sup>8</sup>

これは、スフミ主教管区をクバン州<sup>9</sup>へ併合するのみならず、グルジア・エクザルフ下から宗務院下に移管しようとしていたことを示唆している。<sup>10</sup>これらの事実は、ロシアがグルジアからアブハジアを切り離して自分たちの側へひきつけようと意図していたことを窺わせるものである。また、すでに 1887 年 9 月 15 日付のクタイシ軍務知事<sup>11</sup>代理の報告書においても、「スフミ管区でのグルジア人の動きは地域のロシア化（*обрусение*）のブレーキとなっています」<sup>12</sup>とグルジアのアブハジア進出に対する警戒感が示されている。

このように、イスタンプルのロシア大使や現地の統治者・宗教指導者などが、アブハジアの新アトス修道院に現地における「純ロシア」化の拠点としての役割を期待したこと、そして「グルジアの影響」からのアブハジアの切り離しを意図したことを示す複数の証拠が見られる。しかし、実際に新アトスがアブハジアの「純ロシア」化の道具となったのか、そもそもアブハジアの「純ロシア」化政策というものが実際に行

---

の訳語をあてている。佐原徹哉「東方正教と民族の誕生——ブルガリア教会独立運動と地域社会」柴宜弘、佐原徹哉編『バルカン学のフロンティア（叢書東欧 10）』彩流社、2006 年、201–242 頁。本稿のグルジアについては「エクザルフ」で統一する。グルジアでは、東西のいずれもがロシアに併合される以前に教会首長（*Католикос*）を戴く独立教会（*Автокефальная церковь*）の地位にあった。1814 年にロシアはグルジアのカトリコスを廃止、東西グルジアを統括する「グルジア・イメレチア・エクザルフ」（*Экзарх Грузинский и Имеретинский*）とシノド局（*Синодальная контора*）とを設置し、宗務院に従属させた。またグルジア・エクザルフは初代のヴァルラアム（グルジア人）を除いて全員ロシア人が任命されていた。

<sup>8</sup> *Джемал Гамахария, Бадри Гогия* *Абхазия-Историческая область Грузии* (Историография, документы и материалы, комментарии) с древнейших времен до 30-х годов XX века. Тбилиси, 1997. С. 66–67; *Лежава Г.П.* *Между Грузией и Россией*. М., 1997. С. 53–54; *Жоржоллиани* *Исторические и политические*. С. 34; 高橋清治『民族の問題とペレストロイカ』平凡社、1990 年、276–277 頁。

<sup>9</sup> 1860 年に設置。1893 年にかつカフカス主教座（スターヴロポリ）の管轄、1919 年にスターヴロポリから独立したクバン主教座設置。

<sup>10</sup> 高橋「ロシア帝国とカフカス総督府」47 頁。

<sup>11</sup> アブハジアは 1883 年にスフミ軍管区からスフミ管区になったときクタイシ県に編入され、クタイシ軍務知事の管轄下に置かれた。1903 年からカフカス民政長官の直轄となる。1886 年のスフミ管区の人口 69,000 人中、アブハズ人は 58,963 人（85.7%）、グルジア人 4,166 人（6.0%）、ギリシャ人 2,149 人、アルメニア人 1,049 人、ロシア人 971 人だったとされる。История Абхазии. Гудаута, 1993. С. 205, 208–209.

<sup>12</sup> *Георгий Жоржоллиани* *Исторические и политические корни конфликта в Абхазия/Грузия*. Тбилиси, 2000. С. 34. 具体的にどのようなグルジア人の動きを指すのかは不明。

われたのかどうかという点については、より慎重に検証する必要がある。

たしかに、ソ連期や現代の研究には、帝政ロシアのアブハジアに対するロシア化政策を強調するものもある。例えば、ソ連時代の歴史家 A.オロネツキーは、「正教会はアブハジアにおける帝政の植民地政策の道具だった」<sup>13</sup> と結論付けており、また近年ではグルジアのジョルジョリアニが「帝政ロシアが追求した主要な目的はアブハジアの完全なロシア化（полное обрусение）だった」<sup>14</sup> と断言している。したがって、本稿において新アトスが「純ロシア」化の拠点であったかどうかを検証することは、これらの説を再考する作業の一環となりうるものである。

本稿の目的は、その検証を行い、アブハジアの聖地ピツンダの新アトスへの併合が「純ロシア」化政策の一環であるとは必ずしも言えないこと、新アトス修道院と付属学校が現地アブハズ人住民の教育や正教改宗に大きな役割を果たしたわけではなかったこと、アブハジアからグルジアの影響を払拭することがアブハジアの「純ロシア」化政策を直接意味するものではなかったことを指摘することである。その作業を通じて、新アトスがアブハジアの正教の拠点だったとしても、「純ロシア」化の拠点ではなかったという結論を導き出す。

以下では、新アトス修道院設立までの経緯として、アトスの聖パンテレイモン修道院で起こったマカーリー修道院長就任問題と、アブハジアの正教の歴史についてまず整理し、そののちアブハジアの「純ロシア」化問題について検討する。また、本稿ではトビリシの文書館史料の分析を中心とし、中央のアルヒーフによるペテルブルク側の思惑の解明については今後の課題とする。

## 1. 先行研究と史料について

まず、日本における帝政ロシアとアトスに関する研究の嚆矢として、渡辺圭の諸研究<sup>15</sup> が挙げられる。特に論稿「ロシア正教会における 20 世紀初頭の異端論争『讚名派』問題——その思想的特徴と『アトス山の動乱』の背景」は、宗教思想の分析を主軸としながらも、アトスに対するロシアの影響力拡大政策とそれが遠因となって引き起こされた「讚名派」事件を、当時のバルカン情勢さらには新アトス修道院設立までの経緯を含めた幅広い視野で論じている。

その他の新アトス問題に関する先行研究としては、アトスの聖パンテレイモン修道院における内部抗争について、帝政期の著名な宗教問題研究者である A.A.ドミトリエフスキーの研究<sup>16</sup>、N.フェネルの研究<sup>17</sup>などを参照している。アブハジアの新アト

<sup>13</sup> *Олонецкий Православная церковь*. С. 146.

<sup>14</sup> *Жоржוליანი Исторические и политические*. С. 36.

<sup>15</sup> 渡辺圭「ロシア正教会における 20 世紀初頭の異端論争『讚名派』問題——その思想的特徴と『アトス山の動乱』の背景」『ロシア史研究』第 76 号、2005 年、78-98 頁；同「アトス山の長老聖シルアン——ある聖人の肖像」『ロシア思想史研究』第 4 号、2007 年、427-445 頁。

<sup>16</sup> *Дмитриевский А.А. Граф Игнатъев как церковно-политический деятель на*

ス修道院や正教化政策に関しては、A.オロネツキーの研究、<sup>18</sup> C.ラコバの諸研究、<sup>19</sup> 現在の新アトスの修道司祭ドロフェイによる諸研究、<sup>20</sup> そして高橋清治と北川誠一の諸研究<sup>21</sup>を主に参照した。

文書館史料としては、カフカース総督府（наместничество）が設置されていたチフリス（現在のトビリシ）の行政文書として、グルジア国立中央歴史文書館（トビリシ、以下 ЦГИАГ）<sup>22</sup> のフォンド（文書グループ）7番『カフカース民事管理総局』<sup>23</sup>、489番『グルジア・イメレチア・シノド局』<sup>24</sup>、493番『カフカース正教復興協会』<sup>25</sup>を参照。その他に当時チフリスで発行されていたロシア語新聞『カフカース』<sup>26</sup>を参照している。

## 2. ロシアのアトス政策とマカーリー修道院長就任問題

アトスのいわゆる「ロシア人修道院」<sup>27</sup>として知られる聖パンテレイモン修道院（別名ルシク）は、12世紀にロシア人によって建設された修道院が基礎になっているとされる。露土戦争などの影響により一時期廃れ、ギリシャ人修道士団の管理下に置かれた時期もあった。19世紀初頭に少し離れた場所に新たに建て直されて現在に至り、古いほうの修道院は「スタールイ・ルシク」と呼ばれるようになる。露土戦争終結後の

---

православном востоке. СПб., 1909.

<sup>17</sup> Nicholas Fennell, *The Russians on Athos* (Oxford; P. Lang, 2001).

<sup>18</sup> Олонецкий Православная церковь.

<sup>19</sup> Станислав Лакоба Очерки политической истории Абхазии. Сухуми, 1990; Он же. Абхазия после двух империй: XIX–XXI вв. Славяно-евразийские исследования. Вып. 5. М., 2004.

<sup>20</sup> Иеромонах Дорофей (Дбар) История христианства в Абхазии в первом тысячелетии. Новый Афон, 2005; Он же. Краткий очерк истории Абхазской православной церкви. Издание третье, исправленное и дополненное. Новый Афон, 2006. この二文献は松里公孝教授からご提供頂いた。

<sup>21</sup> 高橋『民族の問題とペレストロイカ』; 同「ロシア帝国とカフカース総督府」; 同「帝国のカフカース支配と『異族人教育』」、北川誠一「アブハズィア、グルジア紛争と歴史記述——サムルザカノ人問題」『旧ソ連の地域別研究——コーカサス地方を中心として・平成10年1月』日本国際問題研究所、1998年、1–24頁; 同「アブハジア歴史人口統計論争」木村喜博編『現代中央アジアの社会変容』東北大学学際科学研究センター、1999年、91–126頁。

<sup>22</sup> Sakartvelos sakhelmtsipo saistorio arkivi (SSSA). ロシア語では Центральный Государственный Исторический Архив Грузии (ЦГИАГ).

<sup>23</sup> Департамент главного управления главнначальствующего гражданской частью на Кавказе.

<sup>24</sup> Грузино-имеретинская синодальная контора.

<sup>25</sup> Общество восстановления православного христианства на Кавказе.

<sup>26</sup> Кавказ: Газета политическая и литературная.

<sup>27</sup> 「ロシア人修道院」の修道士がエトノスとしての「ロシア人」に限られていたわけではない。また例えばアトスのイヴィロン修道院は一般に「グルジア人修道院」とされるが、ミングレリア人などが含まれていた。「ギリシャ人修道士団」の意味するところも同様である。

1830年に再びロシア人修道士団はルシクにおける勢力を取り戻し、ロシアからの財政援助も増えた。特に、1845年にニコライ1世の次男であるコンスタンチン・ニコラエヴィチ大公が修道院を訪れたのを契機に、アトスのロシア人修道士の立場は強まったとされる。<sup>28</sup> ギリシャ人修道院長ゲラシムのもとでギリシャ人とロシア人の修道士団は一つの修道院内で平穏に共存していたとされる。<sup>29</sup>

しかし1840年代には、すでにロシアのオスマン領正教圏への進出が開始されており、その動きがギリシャ人聖職者を刺激するようになる。当時英仏の近東進出に伴い、プロテスタント勢力とカトリック勢力によるパレスチナ進出の動きが強まったため、これに対抗し、1847年に外相K.B.ネッセルローデはニコライ1世と宗務院の許可を得て「在パレスチナ・ロシア宣教団」を結成し、翌年聖地に送り込んだ。しかし聖墳墓教会を拠点とするエルサレム総主教座では、ギリシャ人修道士で構成される「聖墳墓教会兄弟団」が実権を握っており、彼らとロシア宣教団は正教における主導権をめぐる対立することとなる。

さらに1860-1870年代前半は、汎スラヴ主義者として知られたイスタンブルのロシア大使イグナチエフの活発な外交活動が展開された。特に、ブルガリア教会独立問題<sup>30</sup>とベッサラビア修道院領国有化問題<sup>31</sup>が、ギリシャ人聖職者とロシアの間の摩擦が強まる要因となった。ブルガリア教会独立問題では、イグナチエフはコンスタンティノープル総主教とブルガリア人側との対立の調停に奔走したため、結果的にロシア外交は1870年のスルタンによるブルガリア教会独立承認、すなわちコンスタンティノープル総主教座からのブルガリア教会の分離を後押しした形となった。またこのとき、親ロシア派のエルサレム総主教キュリロスがブルガリア側を支持したため聖墳墓教会兄弟団によって解任・追放されるが、イグナチエフは報復措置としてエルサレム総主教座にとって重要な財源であるロシア領ベッサラビアとグルジアにある所領の収入を差し押さえ、彼らを経済危機に追い込んだのだった。

イグナチエフは、アトスにおいてもロシアの影響力を拡大する政策を推し進めた。アトスにおけるロシア人聖職者の勢力強化のため、1866年と1874年に彼自らアトスを訪れて外交の後ろ盾をアピールした。アトスに大勢のロシア人修道士が送り込まれ、

<sup>28</sup> Fennell, *The Russians on Athos*, p. 95; 渡辺「アトス山の長老聖シルアン」3頁。

<sup>29</sup> 1849年にアトスの行政中心地カリエスの近郊に、事実上最初のアトスの「ロシア人」共同体として聖アンドレイ小修道院（スキティ）が建立された。Pavel Troitskiy *Свято-Андреевский скит и русские кельи на Афоне*. М., 2002. С. 5-6. この文献は渡辺圭氏からご提供頂いた。

<sup>30</sup> ブルガリア教会独立運動とロシア外交の関係を扱った研究として、*Виноградов В.Н.* (от. ред.) *Международные отношения на Балканах 1856-1878 гг.* М., 1986. С. 138-143; *Никитин С.А.* *Дипломатические отношения России с южным славянами в 60-х годах XIX в.* // *Славянский сборник*. М., 1947. С. 262-290; *Билунов Б.Н.* (от. ред.) *Болгаро-русские общественно-политические связи 50-70-е гг. XIX в.* Кишинев, 1986. С. 72-81. 教会独立運動がもたらしたブルガリア社会の変容を分析した研究として、佐原「東方正教と民族の誕生」。

<sup>31</sup> 拙稿「エルサレム問題——ロシアの正教政策とベッサラビアにおける修道院領」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』第5号、2005年、123-141頁。

政府から補助金が支給された。また年間何千何万人ものロシア人巡礼者がアトスやエルサレムを訪れ、聖地におけるロシア勢力の拡大に大きな役割を果たしていた。<sup>32</sup> 聖パンテレイモン修道院におけるマカーリー任命事件は、これら一連のロシアによる正教外交とそれに伴う正教陣営同士の軋轢を背景にして起こったのである。

マカーリー修道院長就任をめぐる事件が起こった 1874 年当時、聖パンテレイモン修道院の修道士数は、ロシア人が 400 人以上でギリシャ人が 200 人以下だったとされ、修道院の管理・運営は、事実上ロシア人の手に握られていた。<sup>33</sup> 事件の発端は、聖パンテレイモン修道院長ゲラシムが、後任にロシア人のマカーリーを任命しようとしたことである。マカーリーは 1851 年にルシクの修道士となった人物で、当時はイスタンブルに滞在していた。この任命の動きはギリシャ人修道士団の激しい反発を買い、カリエスの修道院代表集会はルシクがこれまでもこれからもギリシャ人の所有であり、ロシア人修道士団の人数をギリシャ人修道士団より三分の一に減らすなどの決定を下した。しかしマカーリーはイスタンブルにおいてイグナチエフの支援を受け、さらに 1875 年にゲラシムが死去したことにより、親ロシア派とされるコンスタンティノーブル総主教ヨアキム 2 世によって、聖パンテレイモン修道院長として承認された。これにアトスのギリシャ人修道士団は強く抗議し、コンスタンティノーブル総主教座に属するギリシャ人聖職者やギリシャ王国などアトス外部からも批判が噴出した。<sup>34</sup>

これ以上のギリシャ人修道士団との不和を避けるため、1875 年のうちに聖パンテレイモン修道院ロシア人修道士の一部はアブハジアに移住し、聖パンテレイモン修道院のロシア支部として新アトス修道院を設立するに至る。次章で見るように、当時カフカースでは大公によって正教「復興」政策が推進されており、アブハジアでは、1869 年に古代の聖地ピツンダの聖堂が再建されたばかりだった。<sup>35</sup> さらに 1872 年 7 月 21 日付勅令により、ピツンダ聖堂に付属男子修道院が設立された。<sup>36</sup> このような動きを伝え聞いたため、アトスのロシア人修道士たちは大公へのアブハジア移住の請願の仲介をイグナチエフに依頼したのである。冒頭で見たように、イグナチエフは彼らの移住がアブハジアのロシア化に役立つだろうという見解を大公に伝えて説得した。こうしてイグナチエフと大公は、アトスにおけるギリシャ人修道士との対立という正教外交に不利な状況を、国内における辺境統合に有利な条件へと転じたのである。

<sup>32</sup> Theofanis G. Stavrou, "Russian Policy in Constantinople and Mount Athos in the Nineteenth Century," in Lowell Clucas, ed., *The Byzantine Legacy in Eastern Europe* (Boulder: East European Monographs, 1988), p. 242.

<sup>33</sup> Fennell, *The Russians on Athos*, p. 138; Герд Константинополь и Петербург. С. 314. ギリシャ人が 200 人以上、ロシア人が 300 人以上との説もある。Иоаким (Сабельников) иеромонах Великая Стража: Жизнь и труды блаженной памяти афонских старцев иеросхимонаха Иеронима и схиархимандрита Макария. В трех книгах. Книга первая. Иеросхимонах Иероним, старцев-духовник Русского на Афоне Свято-Пантелеимонова монастыря. М., 2001. С. 217. この文献は渡辺圭氏からご提供頂いた。

<sup>34</sup> 渡辺「ロシア正教会における 20 世紀初頭の異端論争」90 頁; Дмитриевский Граф Игнатъев. С. 19–20; Fennell, *The Russians on Athos*, p. 147.

<sup>35</sup> Олонецкий Православная церковь. С. 139.

<sup>36</sup> ПСЗ (Полное собрание законов Российской империи)–2. Т. 47. № 51121.

### 3. 新アトス修道院設立までのアブハジアにおける正教の歴史

1875年8月、修道士アルセーニー率いる数名の修道士が修道院を建てる場所を決めるためにアブハジアを訪れ、ソチから約130キロメートル、スフミから約24キロメートルに位置する黒海沿岸の地点を選んだ。ここは8-10世紀に存在したアブハズ王国の国防の要所であり、またかつてこの地に十二使徒の一人シモン・カナニート（新約聖書では「熱心党のシモン」）がキリスト教の宣教に来て殉教したとされ、その埋葬地に4世紀に建立されたとされる聖堂が半壊の状態に残っていた。<sup>37</sup>

この地に隣接するピツンダは、アブハジアのみならず西グルジア全体にとってのキリスト教信仰の中心地だった。325年の第1回ニカイア公会議にピツンダ主教が出席したとされている。カフカースの正教化に力を注いでいたビザンツ皇帝ユスティニアヌス（在位527-565年）は541年にアブハジアに聖職者を派遣してピツンダに聖堂を建設し、コンスタンティノーブル総主教座に従属する大主教座を設置した。<sup>38</sup>

8-10世紀にはアブハズ王国が存在したが、10世紀末からカルトヴェリの影響が強まり、カルトヴェリ・アブハズ王国が成立した。これ以来アブハジアのグルジア化が進んだとされ、例えばギリシャ語やアブハズ語にかわってグルジア語が普及するようになり、主教職にもグルジア人が就任するようになったとされる。<sup>39</sup>

1390年、ミングレリアの君主ダディアニがアブハジアを征服し、ピツンダ主教座もミングレリア出身のアルセーニーが就任する。アルセーニーはコンスタンティノーブルに独立を認められ、アブハジア・ビチヴィンツァ・カトリコスとしてイメレチア、ミングレリア、アブハジア、セヴァネチア主教座などを管轄下に置いたとされ、これ以来、アブハズ人聖職者はイメレチアやミングレリアなど西グルジア勢力に押されて権威を失うとされる。1455年にイメレチアと統合してアブハズ・イメレチア・カトリコスに改称、1657年にカトリコス座はイメレチアに移ってイメレチア・アブハジア・カトリコスとなるが、これも1795年に廃止され、ロシアへの統合が進められた。<sup>40</sup> 1814年、チフリスを拠点とした、ロシア宗務院に従属するグルジア・イメレチア・エクザルフが、東西グルジアを管轄下に置いた。

<sup>37</sup> И.Н. (сост.) Абхазия и в ней Ново-Афонский Симоно-Кананитский монастырь: С картами абхазского побережья и части Римской империи, с рисунками памятников христианства в Абхазии, видов Ново-Афонского монастыря и портретами почивших старцев Афонского Св. Пантереимона монастыря. М., 1899. С. 111-112; Авидзба С.Д. Новоафонский Паителейионский собор: Филиал Абхазского государственного музея. Сухуми, 1977. С. 4-6; Пачулия В.П. Новый Афон: Историко-культурный очерк. Сухуми, 1971. С. 3-22; Мархалия И.Р. Новый Афон: Псырдзха. Сухуми, 1978. С. 1-7; Иоаким Великая Стража. С. 236.

<sup>38</sup> Покровский Никандр Краткий очерк церковно-исторической жизни православной Грузии со времени появления в ней христианства и до вступления ея в подданство России. Тифлис, 1905. С. 43.

<sup>39</sup> Дорюфей Краткий очерк. С. 8-10.

<sup>40</sup> Авидзба Новоафонский Паителейионский собор. С. 4; Пачулия В.П. Новый Афон. С. 17-18; Е.К. (Кирион) Краткий очерк истории грузинской церкви и экзархата за XIX столетие. Тифлис, 1901. С. 68, 78-80.



アブハジアがロシアに併合されたのは1810年のことだったが、ロシアによる正教布教を媒介としたこの地への影響力の拡大は18世紀からすでに開始されていた。1745年、ロシアとグルジアの共同で、グルジア人聖職者から構成される「オセチア宗教委員会」<sup>41</sup>をキズリャルに設立、1816年に拠点をモズドクに移し、オセチアを中心にカフカース地域の正教布教活動を行った。<sup>42</sup>

1860年には、カフカース総督 А.И.バリャチンスキー（在任1856–1862年）の主唱により、「カフカース正教復興協会」<sup>43</sup>がチフリスを拠点に発足する。バリャチンスキーは、かつてキエフ・ルーシより先にキリスト教を受容したカフカースに再び正教を「復興」させ、イスラーム色を払拭することがシャミーリやミュリディズムとの戦いに役立つと考え、その政治的重要性をペテルブルクに訴え、彼と個人的に親しかったアレクサンドル2世と皇后マリヤ・アレクサンドロヴナの支持を取り付けたのだ。<sup>44</sup>協会の支部はオセチアのみならずアブハジアやミングレリアなど西グルジアにも設置され、宣教活動や土着言語による教育を行う学校の建設が行われた。

それに先立つ1851年には、初代カフカース総督 М.С.ヴォロンツォフ（在任1844–1854年）<sup>45</sup>の積極的な支持で、アブハジアに再び主教座が設置された。ニコライ1世による承認後も主教座設置が実行に移されずにいた1850年、ヴォロンツォフは、「延期は我々のすべての願いにとって極めて望ましくない。我々の正教信仰にとって、そしてこの未開の山岳に正教を普及させることによって常に得られるはずの有益な政治的影響にとって、大いなる成功への確かな希望をずっと先送りすることになるかもしれない」<sup>46</sup>と主張している。

このように、外交官のイグナチエフのみならず、ヴォロンツォフ、バリャチンスキーという現地統治者たちもまた、正教を辺境統合のための政治的道具として認識していたことがわかる。そして前述のように、ミハイル大公時代のアブハジアでは、1869年

<sup>41</sup> Осетинская Духовная Комиссия.

<sup>42</sup> Гатуев А. Христианство в Осетии // Владикавказские епархиальные ведомости. 1896 г. № 10–12, С. 180–185; Беляев И. Русские миссии на окраинах. Историко-этнографический очерк. СПб., 1900. С. 34–38; Калоев Б.А. Осетины (историко-этнографическое исследование), издание 2-е. М., 1971. С. 287–288; Геден Митрополит Ставропольский и бакинский История христианства на Северном Кавказе до и после присоединения его к России. М.-Пятигорск, 1992. С. 79–80.

<sup>43</sup> Общество восстановления православного христианства на Кавказе.

<sup>44</sup> この協会は、まず宗務院の直轄下に置かれ、のちにグルジア・エクザルフ直属となる。Краткая историческая записка об Обществе Восстановления Православного Христианства на Кавказе // Прибавления к Духовному Вестнику Грузинского Экзархата. № 7. 01. 06. 1891, С. 7–16; Зиссерман А.Л. Фельдмаршал князь Александр Иванович Барятинский 1815–1879. Т. 3, М., 1891. С. 99–115; Скитский Б.В. Очерки истории горских народов. Орджоникидзе, 1972. С. 95. 当時ロシアはイマーム（宗教指導者）率いるミュリディズムというイスラームの神秘主義教団がダゲスタンとチェチェンに樹立した国家とカフカース戦争を展開していた。シャミーリは第三代目イマームで、1859年にロシア軍に降伏する。

<sup>45</sup> ノヴォロシア・ベッサラビア総督（在任1828–1854年）との兼任。

<sup>46</sup> Олонецкий, Православная церковь. С. 135.

にピツンダの聖堂が再建され、1872年にはピツンダ聖堂に付属修道院が設立された。アトスの聖パンテレイモン修道院のロシア人修道士がアブハジアを移住先に選び、他方ではイグナチエフがアブハジアの正教化に彼らを利用しようと考えた背景には、このような現地での正教拡大の動きがあったのである。

ここまでは、アブハジアに新アトス修道院が設立されるまでの経過を整理した。以下では、「純ロシア」化の役割を期待された新アトスが、実際にその役割を果たしたのかどうか、ロシアが実際にアブハジアの「純ロシア」化政策を追求したのかどうかについて検証する。

#### 4. 聖地ピツンダの併合

この章では、1885年に実行された、アブハジア古来の聖地ピツンダの新アトスへの併合が、アブハジアの「純ロシア」化政策であったかどうかについて検討する。

1885年3月2日付の勅令により、かつてカトリコス座が置かれていたピツンダ聖堂が、領地219デシャチナ630平方サージェンと松林301デシャチナ1,110平方サージェンとともに新アトスのシモン・カナニート修道院に移管された。<sup>47</sup> 同時にこの年、アブハジアの「正教の源泉」を強化するという目的で、1869年以来イメレチア主教の管轄下に置かれていたアブハジア主教管区が、新アトスを拠点とするスフミ主教管区として独立することとなった。<sup>48</sup>

この経過を概観すると、ピツンダの新アトスへの併合は、アブハジアをグルジアから切り離し、ロシア人修道院である新アトスを拠点に再編成する「純ロシア」化政策の一環であるかのように思われる。しかしここでは、このピツンダ併合が必ずしもそのような事例とはいえないということを指摘する。ここでの論点は二つある。第一に、ピツンダ併合の主な理由は、新アトスが建てられる以前からのピツンダの財政的困窮、ピツンダ修道院に派遣されてきた聖セルゲイ三位一体修道院の修道士団の無為、1877-1878年の露土戦争による修道院の破壊と現地アブハズ人住民の減少などであり、新アトスの登場そのものが必ずしも決定的な理由ではなかったこと、第二に1875年の新アトス設立当初からピツンダの新アトスへの併合の提案があったにもかかわらず、10年後の1885年までその案の検討が見送られてきたという点である。以下では、この二点について考察する。

冒頭で述べたように、1869年にピツンダ聖堂が復旧され、1872年に聖堂付属男子修道院が設立された。この修道院設立の目的は「周辺地域住民であるアブハズ人の間に

<sup>47</sup> ПСЗ-3. Т. 5. № 2786. なお1デシャチナは1.093ヘクタール、1平方サージェンは4.552平方メートル。

<sup>48</sup> *Олонецкий, Православная церковь*. С. 141. 1900年の時点で、スフミ主教管区では全住民が15万人、このうち正教徒は10万人にのぼったとされる。ЦГИАГ, ф. 489, оп. 1, д. 46428, л. 4, 9-9об. またこの1885年、北カフカースにおいても主教管区の再編成が実施され、スターヴロポリ、ウラジカフカース、スフミの三主教管区に分割される。

キリスト教信仰の種を蒔き、それによって地域の聖俗両方の発展に影響を及ぼすこと」<sup>49</sup> だったとされる。1872年7月21日の勅令によると、修道院のスタッフは、修道院長、修道司祭一人、修道輔祭一人、修練士二人とされ、国庫から年間1,200ルーブリの支給が定められた。<sup>50</sup>

ピツンダ修道院の修道院長には、カムチャッカにおける布教活動で知られるモスクワ府主教イノケンティ（在任1868-1879年）の推薦で、セルギエフ・ポサードの中心である聖セルゲイ三位一体修道院の大主教フェオフィルが任命された。1873年12月、彼は数人の修道士を連れてロシアからアブハジアのピツンダに赴任している。<sup>51</sup> この経緯についての詳細は不明であるが、1869年以来イメレチア主教がアブハジア主教管区を統括していたにもかかわらず、グルジア人ではなくわざわざロシアから修道院長と修道士団とをアブハジアに派遣したことは、グルジアにかわってロシアの影響を強めようという思惑があった可能性が考えられる。

しかし、修道院長を含む正式メンバーがわずか5人であり、また国からの補助金が修道士の生活すら支えられないほどわずかだったことは、ピツンダをアブハジア宣教の拠点にしようというロシアの意気込みの乏しさを示している。1875年にアトスから修道士団が移住し、ミハイル大公から広大な土地を分与されて新アトスを建設すると、ピツンダの修道院長フェオフィルは彼らと接触し、スフミ軍管区長クラフチェンコとイメレチア主教ガヴリールに「十分な予算なしにはピツンダの修道院の運営・維持はまともに行うことができない。したがって、この修道院を十分な資金を有するアトスの修道士団に移管するのがよいのではないか」<sup>52</sup> と伝えた。ガヴリールもグルジア・エクスアルフ（エヴセヴィ、在任1858-1877年）もピツンダの新アトスへの移管に賛同した。

さらに、修道院の経済的窮乏は、ピツンダの修道士の無気力化につながった。1877年の11月24日付の新聞『カフカース』の記事「アブハジアからの手紙」は、彼らの活動について次のように述べている。

我々は、アトスから来た修道士の活動とは異なる、ピツンダ修道院の修道士の無為な暮らしぶりの証人となった。ピツンダは数世紀にわたって黒海東岸全域のキリスト教聖地のはずだった。彼らの俸給はわずかであり（間違いでなければ修道院長は年間200ルーブリ）、生活を支えることに没頭しなければならず、自分のためにひたすら働き、修道院の門から出るのは、寄付金を受け取るためだけのようだった。<sup>53</sup>

スフミ軍管区長クラフチェンコも同様に、アトスから来た修道士たちの生活が、ピツ

<sup>49</sup> ЦГИАГ, ф. 7, оп. 1, д. 3097, л. 6.

<sup>50</sup> ПСЗ-2. Т. 47. № 51121.

<sup>51</sup> ЦГИАГ, ф. 7, оп. 1, д. 3097, л. 10об.

<sup>52</sup> ЦГИАГ, ф. 7, оп. 1, д. 3097, л. 7.

<sup>53</sup> Письма об Абхазии, 6-е // Кавказ: Газета политическая и литературная. № 239. 24. 11. 1877. С. 2.

ンダにいる「聖セルゲイ三位一体修道院の修道士の生活と全く異なり、敬虔さと勤勉さの模範を示している」と述べ、ピツンダの郊外の集落やその土地や松林や湖などを新アトス修道院における林業や漁業のためにすべて移管することを提言した。<sup>54</sup>

このように、アトスの聖パンテレイモン修道院から来たロシア人修道士の勤勉な生活ぶりが、セルギエフ・ポサードの聖セルゲイ三位一体修道院から来たピツンダの修道士の無為を際立たせ、また国から手厚い保護を受ける新アトスと困窮するピツンダ修道院との待遇の差が要因となって、新アトス設立当初からピツンダの新アトスへの併合が提案されていたのだった。

しかしこの併合問題の審議は延期された。理由は不明であるが、ピツンダ修道院長、スフミ軍管区長、イメレチア主教、そしてグルジア・エクザルフが移管を支持していることから、チフリスのカフカース総督かペテルブルクが反対した可能性が考えられる。いずれにしても、ピツンダの新アトスへの併合を求める現地の声が中央によって即実行に移されたわけではなかったことがわかる。

この併合問題は 1877-1878 年の露土戦争後に再び提起されることとなる。この露土戦争で、スフミはトルコ軍に占領され、ピツンダの修道士団は修道院を捨ててロシアに避難し、聖堂も修道院も破壊された。また現地アブハズ人住民が数万単位でオスマン帝国領に移住したとされる。<sup>55</sup> 例えば 1877 年 9 月 29 日付の新聞『カフカース』は、28,000-35,000 人のアブハズ人がアナトリアに移住したと報じている。<sup>56</sup>

戦争が終わるとイメレチア主教のガヴリールはフェオフィルと修道士団にピツンダに帰還するように要請した。しかし 1878 年 2 月 24 日付の報告で、フェオフィルはピツンダへの帰還にあたって以下の 5 つの条件を出してきた。

- ① 修道院の予算を 1,200 ルーブリから 5,000 ルーブルに増額
- ② 修道士団の再建
- ③ 修道院周辺にある沼沢の干拓のための具体的な措置
- ④ 戦時中に破壊された修道院の撤去・修理
- ⑤ 付属学校開設の経費の支給。この学校がなければ修道院は現地住民に何らの影響力も持ちえない。

しかし、グルジア・イメレチア・シノド局は、アブハズ人住民が戦時中にオスマン帝国に去ったために、アブハズ人への宣教という修道院の目的はもはや達成されないとし、フェオフィルの提示する条件を受諾することはできず、地域の負担を軽減するためにも修道院を廃止するのがよいという見解を示した。さらに「ザカフカース全土において、最も古いキリスト教の古代遺跡のひとつであり、見事な古代建造物である」

<sup>54</sup> ЦГИАГ, ф. 7, оп. 1, д. 3097, л. 11.

<sup>55</sup> アブハジアの人口問題については、北川「アブハズィア、グルジア紛争と歴史記述」；同「アブハジア歴史人口統計論争」。

<sup>56</sup> Кавказ: Газета политическая и литературная. 29. 09. 1877. С. 3.

ピツンダ聖堂は再建し、新アトス修道院に編入することを提案した。また修道院の予算については、修道士の俸給、聖堂の修理費とそれに付随する建築費用の一部を差し引いて、1,200 ルーブリのまま据え置くという案を提示し、総督の見解を求めた。<sup>57</sup>

このように、露土戦争によって、ピツンダ聖堂と修道院が壊滅的な打撃を受け、修道士団がロシアに去って戻らず、さらに宣教活動の対象であるアブハズ人住民の多くがアブハジアを去ったことが原因で、再びピツンダの新アトスへの移管が議論されることとなった。しかしこれは、ロシアによるアブハジアのロシア化政策というよりもむしろ、露土戦争の被害対策という性格に近いものだった。

しかも、やはり事情は不明であるが、このときでさえ移管は実行に移されなかった。<sup>58</sup> 1881年、アレクサンドル2世が暗殺されてアレクサンドル3世が即位する。1882年にカフカース総督制が廃止され、内務省直属の民政長官による統治が導入され、教育現場でもロシア語教育の強制が行われるようになったとされる。そして1885年ついにピツンダ聖堂が新アトスのシモン・カナニート修道院に移管されるのである。このように、カフカースの「強圧的なロシア化政策が展開された」<sup>59</sup> とされる1880年代に至って、ようやく併合が実行されたのだった。破壊され無人状態だったピツンダの聖堂は、新アトスの修道士の手によって修復され、礼拝が再開されることとなる。<sup>60</sup>

以上の経緯から、聖地ピツンダの新アトスへの併合の背景にさまざまな要因が介在していたことが明らかとなった。ピツンダの新アトスへの併合は、新アトスの登場が直接の契機だったとしても、決定的な要因だったわけではなく、露土戦争の影響によるアブハズ住民の減少や現地の財政状況などが主な理由だった。また新アトスが設立された1875年から併合が提案されていたにもかかわらず、10年後の1885年まで延期され続けていた。アレクサンドル3世と宗務総監ポベドノスツェフがこの併合を積極的に推進したのかどうかは不明であるが、少なくともペテルブルクが一貫して新アトスを道具にアブハジアの積極的な「純ロシア」化を推進していたわけではなかったと考えられる。露土戦争後、破壊され修道士もいないアブハジア古来のピツンダ聖堂が一扫されることもなく、「キリスト教の見事な古代建造物」として新アトス管理下で再建されたことも、ピツンダ併合が「純粋なロシア正教化」を意図した政策ではなかったことを示唆していると思われる。

たしかに、政府の後ろ盾による新アトスの規模の拡大や経済的繁栄が、結果として地域のロシア化・正教化に貢献したであろうことは疑いない。新アトス修道院の規模はピツンダ併合後もさらに拡張し、広大な庭園の湖には噴水が設置され、ワイン醸造所や漁場の経営、ロシアで三番目となる水力発電所が1902年に建設された。また巡礼者の便宜のために汽船航路や船着場、敷地内を巡る鉄道といった交通路も整備され、

<sup>57</sup> ЦГИАГ, ф. 7, оп. 1, д. 3097, л. 6–7.

<sup>58</sup> フェオフィルの条件提示から1885年に実際に新アトスに併合されるまでの期間、ピツンダがどのような状態にあったのかは不明。

<sup>59</sup> 高橋「帝国のカフカース支配と『異族人教育』」77頁。

<sup>60</sup> Иоаким Великая Стража. С. 271.

皇帝一家や重要人物たちも参詣に訪れている。<sup>61</sup> しかし、新アトスそれ自体が正教の中心地・ロシア人の拠点としての広告塔であったとしても、実際に周囲を「純ロシア化」していく影響力を持っていたのかどうかを判断するには、新アトスの存在がグルジア人勢力の牽制にどれほど効果を挙げたかなど、今後のさらなる分析が必要となるだろう。

## 5. 「純ロシア」化か「アブハジア化」か

この章では、ロシアがアブハジアに対する「グルジアの影響」に危機意識を抱いた状況について整理し、それが実際にアブハジアの「純ロシア」化政策に結びついていたのかどうかを、主教管区・教会問題の範囲において検証する。

冒頭で見たように、19世紀後半から20世紀初頭にかけて「グルジアの影響力」を警戒し、アブハジアをグルジアから引き離して自分たちの側にひきつけようという計画がロシア人現地統治者や宗教指導者の間に見られた。

この「グルジアの影響力」とは、特に当時イメレチア主教ガヴリールによって展開されたアブハジアにおける宣教活動を指すと考えられる。前述のように、このガヴリールは1869年からスフミ主教座が設置された翌年の1886年までアブハジア主教を兼任した。1869年に再建されたピツンダ聖堂、そして露土戦争後の1883年に再建された新アトス修道院の開基式は、彼によって執り行われたとされる。<sup>62</sup> ガヴリールは1869-1871年の間に14,000人のムスリム、350人以上の土着信仰の信者、約1,500人のネストリウス派<sup>63</sup>を正教に改宗させたとされる。<sup>64</sup> また、「1868-1869年のアブハジ

---

<sup>61</sup> *Мархольи* Новый Афон. С. 4; *И.Н.* (сост.) Ново-Афонский Симоно-Кананитский монастырь на берегу Черного моря, в Абхазии, близ Сухума. Одесса, 1900. С. 21-22. 他方では、広大な土地と富を独占する新アトスへの批判もあった。地元の歴史家 *К.Д.マチャヴァリヤニ*は、ピツンダから併合した松林を新アトスの修道士たちが伐採して売り飛ばしていると非難し、「新アトスは、国から3,000デシャチナもの土地を付与されながら、まだ不足だとも言うのだろうか。新アトスがアブハジアに何をしてくれたというのか。池や白鳥がアブハズ人に何の役に立つのか」と反発している。*Мачавариани К.Д.* Описательный путеводитель по городу сухуму и сухумскому округу: С историко-этнографическим очерком Абхазии. Сухуми, 1913. С. 191, 199-200; *Пачулиа Вианор* По древней, но вечно молодой Абхазии: Научно-популярный очерк. Сухуми, 1969. С. 163-165.

<sup>62</sup> *И.Н.* Абхазия и в ней Ново-Афонский. С. 101.

<sup>63</sup> アンティオキア出身の神学者ネストリウスを支持する一派。ネストリウスは、イエスが単一の人格の中に人性と神性の異なる本性を持っていたとする「キリスト両性論」の指導的な立場にあり、また聖母マリアが人性のキリストの母であるとし、テオトコス（神の母、生神女）という尊称を否定したが、431年の第3回エフェソス公会議で破門・追放された。中国では景教として知られる。村山盛忠・小田原緑訳『中東キリスト教の歴史』中東教会協議会編、日本基督教団出版局、1993年、22-24、32-38頁；森安達也『世界宗教史叢書3・キリスト教史Ⅲ・東方キリスト教』山川出版社、1978年、16-29頁。グルジア人聖職者はカフカースやイランとの国境地域に居住するアッシリア教会のネストリウス派への宣教活動に早くから熱心だった。*Е.К.* Краткий очерк.

アにおいて、一万人が洗礼を受けた。アブハジアはカフカースの中でも改宗者が特に多い」<sup>65</sup> と彼自身が記録している。したがって、このような西グルジア主導による猛烈なアブハジア正教化の波が、ロシア側に危機感を呼び起こしたものと推測される。1885年にイメレチアから独立したスフミ主教管区が新設されたのは、ガヴリールの手からアブハジアを引き離すことが目的だったことは疑いない。

これとは逆に、アブハジアをクバンに統合しようとした背景には、スターヴロポリ（カフカース・黒海）主教アガフォドルがもたらした北カフカース宣教の成功があったと推測される。アガフォドルは1891-1893年にスフミ主教を務めたのち、スターヴロポリ主教管区にクバン州とスターヴロポリ県が編入された1893年に、スターヴロポリ主教として着任する。彼は帝政崩壊後の1919年までの長期に渡って北カフカースの宣教に従事し、在任中におよそ6,000人を正教に改宗させたとされる。<sup>66</sup> また1900年には、現地のムスリム・仏教徒住民を主な対象とした正教宣教教会主教座委員会を設置している。したがって、カフカースの統治者や宗教指導者たちがアブハジアをクバン州に統合しようと考えたのは、単にアブハジアをグルジアから引き離そうとしただけでなく、宣教活動の強力な推進者であるアガフォドルの管理下に置こうと意図したものと考えられる。

しかし、いずれにしてもスフミ主教管区をクバンに編入し、グルジア・エクザルフの管轄から切り離すという案は、20世紀初頭に何度か繰り返されたにもかかわらず、実行に移されなかった。その理由の解明は本稿の課題を超えるが、少なくともこのことは、1885年に設置され1894年にすでにグルジア・エクザルフ管轄下から離脱したウラジカフカース主教座の事例と比べても、ペテルブルクがアブハジアのロシア正教化に必ずしも積極的ではなかったことを示唆している。

さらに、アブハジアからグルジアの影響を排除しようという動きは、アブハジアの「純ロシア」化ではなく、むしろアブハズ語や文化の普及といった「アブハジア化」の方向へとつながるものだった。

前述のように、カフカース正教復興協会は、現地における正教普及と識字率向上のため、土着言語を使う小学校を設立し、土着言語の教科書を作成するという活動を行っていた。またアブハジア出身の優れた宣教活動家として知られる教父イオアンは、アブハズ語の宗教書を出版し、アブハズ語典拠を普及させた。<sup>67</sup>

確かに、アブハズ語の普及は、グルジアに対抗した長期的な「純ロシア」化政策の第一歩であったと考えられる。1862年に初めてアブハズ語のアルファベットが制定さ

---

C. 132.

<sup>64</sup> Смолич И.К. История русской церкви: 1700–1917. Ч. 2. М., 1997. С. 241.

<sup>65</sup> Зиссерман А. Письма митрополита Исидора к князю Александру Ивановичу Барятинскому // Русский Архив. Апрель, 1893. С. 400–413. (ここでは С. 403)

<sup>66</sup> Геден История христианства на Северном Кавказе. С. 153. 1910年のデータによると、クバン州の総人口は2,531,051人、このうち正教徒は2,326,007人で91.9%を占める。Соколов Л.Т. (ред.) Кубанский Сборник 1910г., труды Кубанского Областного Статистического Комитета. Т. 15. Екатеринодар, 1910. С. 5, 16.

<sup>67</sup> Дорофей Краткий очерк. С. 14.

れたときは、ロシア語と同様にキリル文字が採用された。<sup>68</sup> カフカース総督府評議会のメンバーの一人である E.F. ヴェイデンバウムは次のように述べたとされる。

アブハズ語は文字も文学も持たず、もちろん遅かれ早かれ滅びる運命にある。問題は、何語をその代替とするかである。住民に文化的理念や概念を伝播する役割を果たすのはグルジア語ではなくロシア語であることは明らかである。したがって私が思うには、アブハズ語の文字の制定は、それ自体が目的などではなく、教会や学校においてグルジア語の使用を減らし、徐々に国家語に変えていく手段にすぎないのである。<sup>69</sup>

それでも、アブハズ人にロシア語が全面的に強制されたのではなく、まずアブハズ語の普及が図られたこと、したがってグルジアへの対抗策がアブハジアの「純ロシア」化政策に直結していたわけではなかったことは、やはり指摘されなければならない。1892年には、グルジア教会のアブハズ人への影響力に脅威を感じるという理由で、宗務院が主導して典礼をアブハズ語に翻訳する委員会を発足させ、またアブハズ人の教師や聖職者の養成に力を入れたとされる。<sup>70</sup> 20世紀初頭に形成されたアブハズ人聖職者層はこの委員会で活動し、アブハズ語の聖書、聖人伝、聖歌集などを出版した。<sup>71</sup> これらの事実は、グルジア化ともロシア化とも異なる「アブハジア化」が進んだことを示唆している。

イグナチエフが「純ロシア精神」普及の拠点となることを期待した新アトスにおいても同様の状況だった。1897年の記録によると、現地アブハズ人への正教普及を目的に設立された付属学校の教科は、読み書き計算のほか、ロシア語、そしてロシア語とアブハズ語の祈祷が教えられていたことがわかる。<sup>72</sup> しかし生徒数は全く増加しなかったとされ、1903年に修道院は、「生徒が増えない一方で、修道士団は50人から600

<sup>68</sup> George Hewitt, ed., *The Abkhazians: a handbook* (Richmond: Curzon, 1999), p. 170; *Жоржюлиани Исторические и политические*. С. 34–35.

<sup>69</sup> *Жоржюлиани Исторические и политические*. С. 34–35; *Лежава Между Грузией и Россией*. С. 56.

<sup>70</sup> *Лакоба Очерки политической истории*. С. 58. 松里教授のご指摘によると、これに類似する現象は西部諸県においても見られた。例えばポーランド人・カトリック勢力のベラルーシ人への影響力に対抗するために、ベラルーシ語保護政策がとられたとされる。*Сталюнас Дариус Границы в пограничье: Белорусы и этнолингвистическая политика Российской империи на западных окраинах в период великих реформ // Ab Imperio* 1 (2003), pp. 261–292. 同様の関係は、バルト地域におけるバルト・ドイツ人・プロテスタント勢力とエストニア、ラトヴィアとの間にも見られる。小森宏美・橋本伸也『バルト諸国の歴史と現在 (ユーラシア・ブックレット no. 37)』東洋書店、2002年、12–15頁。

<sup>71</sup> *Дорофей Краткий очерк*. С. 16.

<sup>72</sup> 卒業生の多くは自分の村に戻ったが、中には助祭、聖歌詠唱者、書記、通訳、商人になる者や、さらに教員養成学校に進学する者もいたとされる。Отчет Общества Восстановления Православного Христианства на Кавказе, за 1894–1895 год. Тифлис, 1897. С. 292–293.



人に増え、修道院の規模も拡大して四つの聖堂が増設された」<sup>73</sup> と宗務院に報告している。

また、1917年までにスフミ主教管区には125の管区教会があり、そのうちアブハズ人の教会が61、ロシア人教会36、ギリシャ人16、ミングレリア・グルジア人が4、混合教会（ロシア人・ギリシャ人かロシア人・ミングレリア人）が8だったとされる。<sup>74</sup> たしかにグルジア系教会の数は著しく少ないが、かといって「純粋な」ロシア人の教会がアブハジアを席卷していたわけでもなかったことを示している。これらの点から、ロシアがアブハジアをめぐるグルジアに対抗意識を抱いていたということ自体が、アブハジアの「純ロシア」化政策が推進されたことを意味するわけではなかったことがわかる。

おわりに

以上の考察から、次の四点が明らかとなった。

第一に、聖地ピツンダの新アトスへの併合には、10年に及ぶ延期と、ピツンダの財政難とロシア人修道士団の無気力、露土戦争による被害やアブハズ人住民の減少といった諸要因が背景にあり、ロシアによる新アトスを道具としたアブハジアの「純ロシア」化政策の一例であるとはいえないこと、第二に、スフミ管区（アブハジア）のクバンへの併合やグルジア・エクザルフの管轄からの独立は、現地からの請願にもかかわらず結局実行されなかったこと、第三に、新アトスの付属学校は現地住民の正教化・ロシア化に著しい効果をもたらさず、またロシア語のみならずアブハズ語典礼が教えられていたこと、最後に、アブハジアからのグルジアの影響を取り除いてロシアにひきつけるという政策は、「純ロシア」化よりむしろ「アブハジア化」につながったという側面があったことである。

この四点から、新アトスがアブハジアの「純ロシア」化の役割を果たすことを期待され、またアブハジアをグルジアから引き離してロシアの影響下に置こうという計画が実際にあったにもかかわらず、ペテルブルクによる積極的なアブハジアの「純ロシア」化政策は見られず、新アトスもそのための強力な道具として活用されたわけではなかったと考えられる。

たしかに、政府や現地行政当局の援助によって、新アトスが大規模な修道院と修道士団を擁し、貴賤を問わず多くの巡礼者が参詣に訪れるアブハジアの正教中心地となり、また地域における経済発展の拠点ともなったことはまぎれもない事実であり、そのような新アトスの存在がこの地域のグルジア人勢力を牽制し、ロシア人に利益をもたらしたであろうことは疑いない。それでも、それは新アトスが周辺地域・住民を「純ロシア」化していく有能な道具だったからというよりも、物理的な規模の拡張と経済発展に付随する宣伝効果によるところが大きいと考えられる。少なくとも本稿の分析

<sup>73</sup> ЦГИАГ, ф. 493, оп. 1, д. 1063, л. 2.

<sup>74</sup> *Дорофей* Краткий очерк. С. 15.

結果は、一部の研究に見られるようなツァーリ政府によるアブハジアのロシア化政策を強調する姿勢とは一線を画し、より慎重な立場をとる必要があることを示唆するものである。新アトスの活動の実態とグルジア人牽制効果のより詳細な分析、そしてアブハジアの正教化・ロシア化についてペテルブルクで実際にどのような議論が行われていたかについては今後の課題としたい。

